



「島のひかり」ホームページアドレス

<https://shimanohikari.jimdofree.com/>



発行

カトリック浦頭教会
広報委員会
五島市平蔵町2716
TEL 0959-00072
印刷・(株)才津印刷所

夏を終えて

主任司祭 工藤 秀晃

はじめに、このたびは浦頭小教区設立五十周年のため、また、特に九月十四日・十五日に行われました記念式典・記念ミサに際しまして、島内外を問わず皆様より多大なご配慮とお心遣い、ご参列を賜りましたことより感謝を申し上げます。十四日・十五日の両日は天候にも恵まれ、神様の御はからいと愛しみの中で無事に終えることができました。ただ、一連の催しものは終えましたが、五十周年は始まったばかりです。この一年のあゆみが、七十五周年、百周年に繋がる大事なものだと思っております。これからもお声をかけていただき、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、夏休み直前の教会学校と日曜日のお知らせで、「夏休みの間、平日の朝六時のミサに引き続いてラジオ体操を行います!ミサ・ラジオ体操ともに小学生・中学生の皆さんの参加をお待ちしています!がんばって来ると、何か良いことがあるかもしれません(笑)」とアナウンスをし、小学生には、『2019 ミサ・ラジオ体操』と銘打ち、毎週土曜日と八月九日・二十一日の二回の登校日を除いた日付を入れたオリジナル「出席カード」なるものを渡しました。まあ、一学期の様子からすれば、普段から典礼当番を含め週に二〜三回はミサに与っている小学生たちですから、「きっと、皆勤賞となる子どもが出るだろうな!」

と思った反面、「週に何回かならないけど、夏休みの間中、毎日早起きをしてミサに来るとなるとどうかなあ? 本人はもちろんのこと保護者の方も大変ではあるだろうし、それに長い休みなだけに、どこかへ泊りがけで出かけることもあれば、体調を崩すことだってあるだろうしなあ。」と思ったりもしました。そのような「行きつ戻りつ」の心境の中でも、心のどこかではやっぱり大いなる期待を持っていたのでした。

結果は?と言えは、子どもたちは、それぞれの都合の中で見事にベストを尽くしてくれたように思います。中でも「姉・妹」「姉・弟」の二組のきょうだい、特に「姉・弟」のきょうだいは、三年生の姉が準皆勤賞、一年生の弟が皆勤賞と「いろいろあっただろうに本当によくがんばったなあ!」と思います。そして、子どもたちと共に保護者の方にも心からの拍手です。

浦頭小教区設立五十周年のスローガンは、皆さんご存じのように「今語り継ごう 尊い信仰 子へ孫へ」です。それぞれの方が、それぞれの場所で、それぞれの方法を用いて実行へと移しておられることだと思います。ただ、一朝一夕に成果が見えるわけではありせんから、これからも各々が出来ることをひたむきに続けて行き、その積み重ねた先にわかるものがあるのだと思います。

今年の夏を終えました。でも、あの「姉・弟」のきょうだいは、今日もかわらず朝のミサに来て、いつもの席で私に勇気と喜びを与えてくれています。

記念講演会 (前夜祭)

九月十四日、五十周年記念事業の一環として夕方より前夜祭が行われた。内容は子供達による教会歴史の発表、コールアンジェラス（お告げのマリア修道会シスターにより結成された聖歌隊）による合唱、長崎南山学園校長の西経一神父様による、「聖書と信仰伝承」と題した講演会の三部構成であった。



子供達の発表は浦頭小教区の歴史、大村藩キリシタンの五島移住、堂崎天主堂・中村長八神父様について、侍者旅行で学習した出津教会ド・ロ神父様について等。多岐に亘る内容であったが、説明用のスクリーン資料は分かり易くまとめられていた。大人も考えさせられる内容もあったが、一人、一人感想を発表している時の子供ながらも感じた言葉は、それぞれが感慨深く良い経験になったのではないかと思う。



コールアンジェラスによる合唱は、独唱やハーモニーで会場内は美しい歌声に酔いしれ、アンコールにも応じて頂いた。西神父様による講演はユーモアたっぷりに私達の信仰生活について話された。何も返答・見返りが無い対象について日々無償の奉仕（愛）を実践できる方は信仰が高められている。悔い改めて許しを請う人にこそ神の深い憐れみがもたらされるといふ事が心に刻まれた。色々な内容で有意義な前夜祭であった。関係者に感謝!!



“浦頭小教区設立五十周年

“ミサと祝賀会” 開かる

九月十五日、主任神父様と共に信徒全体で取り組んで来た日がいよいよやってきた。

当日は、テント・椅子、受付等の準備が八時三十分から始まった。九時三十分頃、大司教様到着。教会の登り坂に沿って並んだ子ども達を含む信徒一人一人と握手をしながら、ゆっくり歩いて来られた。



十時三十分から始まった記念事業は、まず教会の玄関の外にはめられる記念碑の祝別から行われた。

その後、赤尾議長の開式のあいさつがあり、議長は「私たちはこの記念ミサを通して、これから浦頭小教区が新たな決意、新たな信仰の光のもと『聖母マリア様の御保護を願いつつ』浦



あいさつをする赤尾議長

頭教会の守護の聖人である、聖ペトロ・聖パウロのお取り次ぎを願いながら、より一層イエズス様の御心に適う者となる事ができるよう、信徒一同一歩一歩、着実な歩みを重ねて行きます」と強い決意を示された。

続いて鍋内経済委員長から、記念事業報告があった。事業内容が決定するまでの経緯と事業を成す為の①式典部会②記念誌部会③事業環境部会の設置、そしてそれぞれの部会の活動内容について詳しく説明がなされた。そして、いよいよ記念ミサが



大司教様と十五名の神父様により始められた。ミサ中の大司教様の説教は、教会や小教区のあり方、一こうあって欲しいという話しから始まった。

「教会は神様と出会う場所であり、ひとつの小教区の充実が長崎教区の充実につながっていきます。今、私たちの信仰が偶像であるお金や名誉、地位等に向かってないか、偶像を心の中で神様以上にしてないか整理する必要があります。慈しみ深い神様は常識を超えているけど非常識ではありません。今日の説

教の「放とう息子」のたとえでも説明したように、神様はそんな教会から離れている人たちをこそしっかり見守っていらっしゃる。そして、ここに来られている信徒の皆さんは、自分の心こそ放とうしていいか、形だけの信徒になっていないか確認する必要があります。そして、信仰をしている人も内側ののみそれだけでなく、もう一歩踏み出し、外にも発信する信仰を身につけて欲しいと思います。」と語られた。

午後からは舞台をカンパリーホテルに移し、祝賀会が行われた。

まず最初は、平和のぼら保育園の子ども達による「平和太鼓」の演奏。子どもたちは、はきはきした、その中にもかわいらしさがいっぱい詰まった演奏をし、舞台を和ませた。

工藤神父様の主催者代表あいさつは、神父様の誠実なお人柄をそのまま表すような内容で、「これから今までと同様、カ



トリック信徒として誠実に一歩、着実な歩みを続けていきます。」と話された。

また、式典には野口市長も来られ、教会等が世界遺産になり、着実に観光客が増えている事。ただし、その事によって信仰の邪魔をしないように配慮することを大切にしたい、との言葉があった。

乾杯の音頭は、崎浜神父様。ユーモアを交えながらのスタートとなった。途中、赤尾神父様、

シスターの歌には友情出演の野下神父様の登揚があった。また、出席しているシスター、神父様の紹介があり、代表して木口シスター、片岡神父様のあいさつがあった。お二人とも、今日のこの日を迎えるに当たったの信徒の努力に対する労いとおめでとうという気持ちで語られた。

また、祝賀会の序盤では福江教会の中村神父様による若い時の記憶・久賀から船に乗って慈恵院の下に降り、歩いて丘の上立つ浦頭教会に向かって歩い



た事等、懐かしげに語られた。

最後は浜口神父様による一本締め、その前のあいさつでは、「私が神父になった時、ちょうど神羊館が建設中でそこで祝うことも考えられたけれど、少し間に合わず平和のぼら保育園で祝いがあった事が思い出されます。」との話があった。

祝賀会は、二次会がその神羊館に移され、喜びに包まれながら日は暮れていった。



「共に50周年」

私たち44〜45年生まれば今年小教区と共に50周年を迎えました。50年前の小教区誕生の頃を想像すると激動の時代だったのではと思います。新しい土地に教会を建て、中入にあった教会の移転、神父様も交代し、司祭館、保育園の建設と堂崎の記念事業、資料館の整備と目が回る忙しさではなかったでしょうか。子供の頃は「けいこ」に「聖歌隊」、「侍者会」など常に教会に通っていました。しかし、当時子供が多く、みんなが行くから行くという感じで、遊ぶ事が目的でした。故郷を離れ教会から遠のく時期もありましたが、今は微力ながらも貢献して行きたいと思っています。子供の数も減り、信徒数も小教区発足当時からすると3分の1となるなど将来の不安は拭えませんが、これからも小教区と共に歩んでいきたいと思っています。

鍋内 総長

「五十周年に思う」

小教区設立五十周年おめでとうございます。この記念事業を行うに当たり、お骨折り下さった主任神父様始め役員の皆様、本当にお疲れ様でした。そして、ありがとうございます。昭和四十四年と云えば、私にも九月二日生れの息子がいます。数日後に洗礼のお恵みをいただき、発足したばかりの小教区の一員に加えていただいた喜びを懐かしく思い出します。浦頭小教区においても色々な事があり、中でも多くの神父様やシスターの誕生と召命のお恵みをいただいた事は、嬉しい出来事でした。又、反面悲しい事もあり、最大の十字架は叙階されて間もない赤尾孝信神父様が天国へ召された事でした。神様の御計画は計り知れませんが、信徒一同心一つに悲しみに耐え、お捧げした出来事でした。どんな時でも、信徒皆様の強い絆で乗り越えて来た五十年だったと思います。これから先も今回のテーマを忘れず、受け継いだ信仰を子孫へ伝えて行けるよう努力して行きたいと思っています。

K・A

教会内修復

「ただいま進行中」

五十周年を迎えて、中の壁のペンキが剥れたり、ひび割れがあったり、染みが出たりしている所を、足場を掛けないと出来ない場所を先に修理することにしました。最初に男児側、次に女児側、そして正面の順番で行ないました。普段の朝ミサを神羊館の一階で行ない、足場を掛け替えながら、高い所の蛍光灯を外したり、スポットライトを変えたりしました。まだ塗っていない所も、近いうちにやる予定です。

映写会
拍手の中
幕を閉じる

八月二十五日。二番ミサ後、五十周年関連事業として、映写会が久しぶりに行なわれました。映写会は、子供達のスポーツ大会と重なり若干少なめでしたが、それでも信徒四十名程が集まってくれ、室の大きさからして、ちょうど「良いかげん」でした。

今度の映写会は、五十周年事業の一環として設置された、神羊館一階のクラーの一般信徒に対するお披露目にもあたるもので、夏・涼しさの中での映画鑑賞でした。映画は、「ペコロスの母に会いに行く」。主人公の母親の痴呆がテーマでしたが、ユーモア一杯散りばめられていました。映画の舞台は長崎。異国情緒あふれる中、長崎弁が飛び交っていました。そして、最後の場面。愛した人に再会するシーンは、いつまでも記憶に残る感動的なものでした。

中村長八神父様の 生涯を追って⑩

— 会話の途中から続く —

「しかし、パパ様は神父様の事を実によく知っていましたよ。実は、私の使命は最初は欧州だけの予定だったんですよ。ところが、パパが『南米まで足をのばしてはどうかね。』と言われて、政府に電報で聞いたところ、了承されたんですよ。だから、私はパパのお使いですよ。」

「なんとも恐れ入ります。」
法王庁からの勳章贈呈式は翌々日に、大司教講堂において行われた。

山本少将の暖かさに満ちた、素晴らしい功績に対するいたわりのあいさつが終わり、神父様の胸に勳章が飾られると、講堂は拍手のるつぼと化した。その時の神父様の服装は、彼の謙遜さを示すように、質素なもので、植民地巡回に出かける時の服装

のままであった。

彼は叙勲の後も、精力的に活動するが、昭和十五年、巡回中に発病してしまう。アルヴァレス・マシャードの自宅にもどり、バルボーというブラジル人医者

に診てもらったところ、気管支炎にかかっていた。診断してもらったその日の午後、市長がわざわざ訪れて来た。市長は医者

の心得があり、彼もまた、診断してくれた。

「神父様。バルボー君の言う通りです。ここでは看護も療養も思うようにできないでしょう。病院で療養されてはどうですか。」

それに対して中村神父様は、「有難うございます。でも、お医者さんは、あなたとバルボーさんで充分です。わしもやがて八十です。そろそろ、きりをつけてもいいころじゃありませんか。」と、答えた。

記録によると、彼は病気から一度回復したようである。

しばらくして、一九四〇年のある朝、ミサ聖祭中、最後の祝

福の前に彼は失神を起こす。約

二ヶ月続いた病気の中、地区の全ての夫人達が日夜交代で世話をしたが、病状は悪くなつていく。彼は素晴らしい忍耐力で病

気に耐えたが、まもなく永遠の命に旅立つ事が分ると、はつきりした意識の中で全ての信者の一人一人に別れを告げた。同年

三月十四日、中村神父様は七十五年の生涯を閉じた。

葬儀での会葬者は一万人を超え、日伯両国民が棺を担い、色とりどりの花が咲く眺望の良い墓地に向かった。墓はコンクリートで固められ、その中に棺が納められ、その前にレンガの扉が建てられた。

この堅ろうで立派な墓が造られたのは、中村神父様が後に、福者（聖者に一番近い称号）であるいは、聖者になる可能性が予想された事からである。

中村神父様が亡くなった後、

列福調査特別委員会が発足。サンパウロ州のマリアリアで開催されたポツカツ大司教区（サンパウロ州）の全体会議において、全会一致で中村神父様の列福調査開始が勧告された。その後、教皇庁に対して列福調査設置に

関して、申請書が提出された。今もブラジルでは、中村神父様の列福に向けての活動が地道に続けられている。

※列福の意味……カトリック教会において、死後の徳と聖性を認められた信者に与えられる称号を福者といい、その称号を受ける事を列福という。



堂崎教会にある記念植樹
(イヌマキの木)の碑

侍者旅行

日程

8/5

諫早教会

(岩崎神父様案内)

出津教会 (Sr赤窄案内)

↓先祖のルーツを辿る

8/6

ペンギン水族館

県立美術館

8/7

夢彩都

五年 小田 蒼海

私が教会子供旅行で心に残った事は、出津（外海地方）でのお勉強でした。赤さこシスターや地元の人からド・ロ神父様の事や出津の歴史、出津と五島の関係などのお話しを聞きました。出津の人は、昔五島に移り住み、禁教令でキリスト教をかくしながら守り続けた昔の人達にびっくりしました。私は、守り続けてきた信仰を大切にこれからも、教会にしっかり行き、信仰を守っていききたいと思えます。神父様、保護者の方々、旅行に行かせていただき、ありがとうございました。



五年 鍋内 翔吾

ぼくは、ド・ロ神父様が外海の人々にしたことがすごいと思いました。また、高価な物を外海の人々のために使っていたことがすごいと思いました。

三年 なべ内 みゆ



わたしが、じしゃりよ行で、一番楽しかったことは、ペンギン水族館です。ペンギンが泳ぐ時にすぐくはやく泳いでいてびっくりしました。しいく員さんの言うことを聞いていてすごかったです。そして、コナンでんもナゾときもむずかしかったです。コナンと写真もとれたし、ナゾときがすきになりました。

おたより

毎回楽しみに拝読させて頂いております。
長崎市 梅木秀雄様

“ありがとう”

長崎市 梅木 秀雄様
平戸市 濱口 末明 神父様
千葉市 入口 春男 様

秘跡

《帰天》

フランシスコ 中口 民雄
八月十三日 八十七歳 浦頭
カタリナ 木口マサ子
八月十三日 七十一歳 浦頭
セシリア 小田スミエ
九月十九日 九十四歳 大泊

ふるさとだより

ペタンク大会 奥浦勢

大活躍

台風一過、遅らばせながらどうにか回復してくれた天候の元、第二十五回ペタンク大会が十月三日から、予定を一日せばめて行なわれた。今回も百七チームが参加。転がる鉄球の行方に合わせ、コート付近の顔達が右へ左へ。
8 ページに続く

―前ページより続く―
 熱戦の結果、奥浦のチームが優勝、準優勝、四位を獲得。近年稀にみる結果でファイナールを迎えた。



新たなチャレンジ

濱崎 毅

夏場の仕事は忙しいし、暑さで仕事だけで体力を奪われ、練習もろくに出来ない、そして自分は5キロまでしか勝負出来ない、勝手にそう思い込み敬遠していた。

しかし、いきなり会社の常務が金子マラソン同好会を作ろうという話になり、夕やけマラソンに参加することになった。エントリーしたからには、目標を

設定しなければならぬ。バラモンキングの木口北斗君が1時間30分で走るといっているので、設定は1時間30分切りの年代別10位以内。これまで以上のトレーニングに打ち込んだ。目標タイムには程遠い。しかし、黙々とトレーニング。

本番を迎えた。この緊張感がたまらない。今日もアドレナリンが出ているのが分かる。「よし！やってみよう！」21キロの旅を終え、設定目標をクリアすることが出来た。

この年になって改めて思った。「自分の限界を作るのは自分である。」みなさんもここで新たなチャレンジをしてみたいかがでしょうか？



左から3番目 濱崎 毅さん
 “金子マラソン同好会のみんなど”

奥浦での運動会

九月二十二日、去年の中止もあり、待ちに待った小学校・中学校・市民合同運動会は、今年も台風の影響により中止となった。

学生は保護者や地域の方々への披露の為に練習されてきた事を思うと心が痛んだが、二十八日に発表会として開催された。

また、二十九日には平和のぼら保育園にて運動会があり、暑いくらいの陽気の中、小さな体を使った様々な表現に会場は笑い、拍手ありと、楽しい一日となった。



編集後記

仕事の休憩時間、ユーチューブを開いてみた。ひとつの動画が目にとまった。『パパは天国にいるの？教皇フランシスコの答え』と題したもの。

五歳位の子どもが教皇様に質問をする場面から始まる。名前は『イマヌエル』。質問できず泣いてしまいうイマヌエルを抱き寄せ耳元で話を聞く。「少し前に父親が亡くなった。父は神様を信じていなかったが、四人の兄弟には洗礼を受けさせた。お父さんは良い人だった。お父さんは天国にいますか？」との問いに教皇様は「子どもに洗礼を受けさせ、息子が父の事を良い人だったという。皆の前で泣く勇気がある。こんな風に育てられる父はきっと正しい。」と答えられ、集まった人たちにも答を導くのです。感動の一場面です。『今語り継ごう 尊い信仰 子へ孫へ』この標語が頭に浮かんだ。

竹山 巧